自然・ひと・体験

編集：日本野外教育学会広報委員会
発行：日本野外教育学会事務局
〒305-8574　つくば市天王台1-1-1　筑波大学体育系野外運動研究室内
TEL&FAX.029-853-6339

天理大学体育学部キャンパス

日本野外教育学会第28回大会（奈良天理）案内
特集「これからの野外教育学会の広報を考える」

「ニュースレター 100号の刊行に寄せて」会長 平野 吉直・理事長 坂本 昭裕　2
日本野外教育学会第28回大会案内　3～6
特集「これからの学会広報を考える」　7～10
日本野外教育学会第7回研究集会報告　11
2024年度 野外教育に関する学位論文題目リスト　12～13
事務局便り　14～15

ニュースレター第100号の刊行に寄せて

平野 吉直（日本野外教育学会会長・信州大学）

日本野外教育学会ニュースレターは、本会が発足（1997年10月）する3カ月前の1997年7月に、「日本野外教育学会設立準備会ニュースレター第1号」として発刊されたのが始まりです。それから28年を経て、この度記念すべき第100号が刊行されました。この間、学会員の皆様のご協力・情報提供等をいただきながら、学会大会や研究集会の開催情報・報告、特集記事・エッセイ、他学会・団体の関連情報、野外教育に関係する新刊書籍の紹介など、幅広い野外教育関連情報を学会員へ発信し続けてまいりました。ニュースレターの発刊にご尽力いただいている学会広報委員の皆様に、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

第100号の刊行を機に、学会員の皆様には広報委員会から、今後の学会ニュースレターの在り方等についてアンケート調査がありました。学会の皆様のご要望・ご意見を参考にしながら、日本野外教育学会ニュースレターが、これまで以上に学会員への貴重な情報提供、本学会の進展に資する社会への情報発信のツールとして進展されることを心から願っています。

ニュースレターの「記憶」

坂本 昭裕（日本野外教育学会理事長・筑波大学）

野外教育学会のニュースレターが第100号を迎えたことを、心より嬉しく思います。これは、27年間にわたって歴代の広報委員会の皆さまが途切れることなく努力を続けてこられた成果であり、改めて深く感謝申し上げます。

これまでに多くの記事に触れてきましたが、そこには書き手の思いや人となりが感じられ、親しみを持って拝読させていただきました。これらの記事が単なる情報伝達にとどまらず、野外教育に関する知識と文化の発展に寄与してきたことを実感しています。

近年、紙媒体はデジタルに取って代わられる傾向にありますが、デジタル情報は流し読みされやすい一方、紙のニュースレターには意識的に読まれるという特長もあるように感じます。

私自身、研究室の机の上で雑然と積まれた資料の中にニュースレターを見つけることがあります。その時、ふと手に取ってみると、以前の活動や出来事が思い起こされ、懐かしさに浸ることもあります。ニュースレターは、時を超え、その時々の思いや記憶をよみがえらせてくれるようです。

日本野外教育学会第28回大会（奈良天理）のご案内

大会実行委員長：中野 友博(びわこ成蹊スポーツ大学)
事務局長：蓬田 高正（天理大学）

大会テーマ：ツーリズムから考える自然体験の価値

日本野外教育学会第28回大会を天理大学にて開催させていただきます。みなさんもご存じのように、奈良は日本最初の都と言われる「藤原京」や「平城京」が置かれていました。また野外教育の源流と言われる「修験道」も、その総本山は奈良吉野にある金峯山寺蔵王堂です。さらに天理の地は天理教の聖地「ぢば」であり、このように昔から奈良の地には、多くの人たちが行き交っていました。そんな日常生活圏外を訪れるツーリズムで、近年はグリーンツーリズム・エコツーリズム・ウエルネスツーリズムのように自然を活用した新たなツーリズムの形態が見られるようになっています。訪れた地域の歴史分野や自然環境を活用することで、環境保全や健康増進、ウェルビーイング、さらにはその地域の活性化にも繋がることが期待されています。

このような背景から、今大会のテーマを「ツーリズムから考える自然体験の価値」と設定いたしました。

主催　日本野外教育学会
共催　天理大学（申請予定）
後援　天理市、天理市教育委員会（いずれも申請予定）

１．期日

2025年6月28日（土）～ 29日（日）

２．会場

天理大学　体育学部キャンパス
〒632-0071　奈良県天理市田井庄町80
https://www.tenri-u.ac.jp

３．大会日程

【第1日目：6月28日（土）】

8:30～　受付開始
9:00～11:00　自主企画シンポジウム
11:15～　理事会
昼食及び休憩
12:50～　開会式
13:00～14:00　基調講演
テーマ「野外教育と地域資源：ツーリズムを通じた新たな学びの創出」
講　師 小川正人 氏(一般社団法人ONSEN・ガストロノミーツーリズム推進機構理事長・一般社団法人ネイチャーホスピタリティ協会理事長)
14:15～16:15　シンポジウム
テーマ『地域資源の可能性を広げる野外教育の役割』
シンポジスト
小川正人 氏(一般社団法人ONSEN・ガストロノミーツーリズム推進機構理事長・一般社団法人ネイチャーホスピタリティ協会理事長)
島田知明 氏(然別湖ネイチャーセンター インストラクター)
西村典芳 氏（流通科学大学 教授）
コーディネーター：西村典芳 氏（流通科学大学 教授）
16:30～17:30　総会
18:00～19:30　情報交換会

【第2日目：6月29日（日）】

8:30～　受付開始
9:00～10:00　研究発表Ⅰ（口頭）
10:15～11:15　研究発表Ⅱ（口頭）
11:30～12:30　野外教育関連企業「株式会社モンベル」とのディスカッション
昼食及び休憩
13:00～14:00　研究発表Ⅲ（ポスター）
14:15～15:15　研究発表Ⅳ（口頭）
15:30～　閉会式

４．第28回大会専用ウェブサイト

各種申込や原稿提出は、下記URLから行ってください。
https://28th-tenri.joes.gr.jp

５．参加費

〈大会参加費〉

	期限前料金	期限後料金
正会員（一般）	5,000円	6,000円
正会員（学生）	3,000円	4,000円
団体会員	5,000円	6,000円

※会員の参加費は抄録代（PDF配付）を含む。

非会員（一般）　3,000円/日

非会員（学生）　2,000円/日

※非会員の参加費は、期限前後料金ともに同額です。

※非会員の参加費には抄録集代（PDF配付、2,000円）は含みません。別途申込ください。

基調講演・シンポジウムのみ（一般公開）　無料

※ただし、事前申込必要

〈情報交換会費〉

正会員（一般）・団体会員・非会員（一般）6,000円

正会員（学生）・非会員（学生）　4,000円

〈発表投稿料〉

正会員　無料　　非会員　3,000円

６．大会参加申込・大会参加費等の納入方法

原則として、第28回大会専用ウェブサイトからオンライン決済サービス“Peatix”を使用して、大会参加申込および参加費等を納入してください。

【申込期限：2025年5月12日（月）】

※申込期限までに参加費納入確認できない場合、期限後料金となります。また、一旦納入された参加費等の返金はしません。

７．研究発表・実践報告の申込および原稿提出

原則として、第28回大会専用ウェブサイトからオンライン決済サービス“Peatix”を使用して、申込をしてください。またそれぞれの「抄録原稿提出要領」に従って抄録原稿データを提出してください。

【申込期限：2025年4月30日（水）】

【原稿提出期限：2025年5月12日（月）】

８．自主企画シンポジウムの申込および原稿提出

「自主企画シンポジウム」とは、第28回大会に参加する学会員自らが、テーマ、司会者、話題提供者、指定討論者等を設定して実施されるシンポジウムです。

企画を希望する会員は、原則として、第28回大会専用ウェブサイトからオンライン決済サービス“Peatix”を使用して、申込みをしてください。

また、「自主企画シンポジウム抄録原稿提出要領」に従って抄録原稿データを提出してください。

【申込期限：2025年4月30日（水）】

【原稿提出期限：2025年5月12日（月）】

９．若手優秀発表賞について

若手研究者の研究活動を推奨するため、研究のオリジナリティ、有用性、研究方法の妥当性、発表技術について審査し表彰します。受賞者には賞状と副賞を授与します。選考対象者は以下の要件を満たしている方とします。

1. 本学会の正会員（一般/学生）である。
2. 研究発表（口頭）の筆頭及び演者である。
3. 年齢が35歳未満（当該年次大会時）である。
4. 発表申込時に若手優秀発表賞の審査を申請した者（エントリー制）。

１０．食事及び宿泊について

宿泊は天理駅・JR奈良駅周辺に宿泊施設がありますので各自でご手配ください。また、当日学生食堂および学内コンビニは営業しておりません。大学近隣には弁当屋、飲食店、コンビニエンスストア等があります。お弁当（1,000円）を注文される方は、参加申し込み時に注文してください。

１１．会場までの交通機関

天理大学　体育学部キャンパス

〒632-0071　奈良県天理市田井庄町80

https://www.tenri-u.ac.jp/about/campus/

◆新幹線の場合

・京都駅から近鉄京都線「天理」行き急行、「橿原神宮前」行きは平端駅で「天理」行きに乗り換え（乗車時間約65分）

・新大阪駅からJR鶴橋駅・御堂筋線なんば駅で近鉄奈良線「近鉄奈良」行きに乗り、大和西大寺駅で「天理」行き、「橿原神宮前」行きは平端駅で「天理」行きに乗り換え（乗車時間約65分）

◆飛行機の場合

・伊丹空港からリムジンバスで、近鉄大和西大寺駅（約50

分）から平端駅で「天理」行きに乗り換えまたはJR奈良駅（約80分）から万葉まほろば線（桜井線）で「天理」行きに乗り換え

・関西国際空港からリムジンバスで、近鉄大和西大寺駅（約80分）またはJR奈良駅（約100分）で「天理」行きに乗り換え

◆車の場合

・西名阪自動車道天理I.Cまたは郡山I.Cから約10分(身障者用駐車スペースをご希望の場合は、事前に事務局にご連絡ください。)

１２．託児について

大会期間中、託児をご利用いただけるように調整しています。ご希望の方は、早めに託児の希望内容をE-mailでお知らせください。

１３．大会事務局・問い合わせ先

〒632-0071 奈良県天理市田井庄町80　蓬田高正研究室
日本野外教育学会第28回大会事務局(蓬田高正)
E-mail: 28tenri@joes.gr.jp
※お問い合わせは、E-mailでお願いいたします。

☆発表資格および注意事項

◆ 発表の資格に関すること

1. 筆頭者および演者は、正会員、名誉会員、団体会員（一般）、賛助会員、および大会実行委員長が認めた者とする。ただし、非会員であっても外国人研究者に関してはこれを認める。
2. 共同研究者には非会員が名前を連ねても差し支えない。
3. 筆頭者および共同研究者に関して、会員は年度会費を期日までに完納していること。また、非会員は所定の発表投稿料(3,000円)を期日までに納付すること(参加費とは別)。
4. 筆頭者および演者は、共同研究者の発表資格・発表投稿料等を把握した上で、申込をしてください。
5. 自主企画シンポジウムの主たる企画者(主催者、責任者)は、正会員、名誉会員、団体会員（一般）、賛助会員、および大会実行委員会が認めた者とする。ただし、非会員であっても話題提供者、指定討論者等として企画に携わることはできる（無料）。

◆ 発表の方法等に関すること

1. 原則として、野外教育研究の投稿規定に準じた未発表の研究に限る。
2. 筆頭の発表（口頭発表、ポスター発表、実践報告）は、１回の大会において１題目に限る。
3. 発表の言語は、日本語あるいは英語とする。
4. やむをえない理由で演者が発表できなくなった場合、事前に大会実行委員長の承認を得て、共同研究者による代演を認める。

◆ 抄録原稿に関すること

1. 一度提出した抄録原稿の訂正はしない。
2. 発表された抄録は、学会ウェブサイトに掲載する。

◆ その他

1. 本学会が定める倫理規定を順守すること。
2. 以上の発表要件に満たない研究は、発表を取り消す場合がある。

研究発表（口頭発表・ポスター発表）抄録原稿提出要領

※大会専用ウェブサイトから「研究発表抄録原稿フォーマット」をダウンロードして、作成してください。

1. 原稿枚数：口頭発表はA4版2頁、ポスター発表はA4版1頁とします。原稿は、白紙を縦置きにし、天地左右に25mmの余白を設定し、　ワードプロセッサ等で作成してください。

２．演題：(14ポイント・ゴシック体) 演題は１行目（必要があれば２行目まで可）に、副題がある場合は改行してそれを記載して下さい。また、演題（あるいは副題）の下の行に、英文タイトルを記載して下さい。

３．氏名：(12ポイント・明朝体) 英文タイトルの下に1行空白を設け、その下の行に氏名と（　）内に所属を記載して下さい。また、共同研究者も同様に連記し、演者氏名の前に〇印をつけて下さい。

４．キーワード：(10ポイント・明朝体) 氏名の下に1行空白を設け、その下に発表内容のキーワード(2～5個)を記載して下さい。

(例) キーワード：〇〇〇〇、〇〇〇〇、〇〇〇〇

５．本文：(10ポイント・明朝体) キーワードの下に1行空白を設け、その下から本文を記載して下さい。本文は、1行あたり20～22文字の2段組とし、１頁の行数は、演題の行を含め40行程度とします。

６．図・表および写真：図・表および写真は原稿に直接挿入し、「通し番号」と「見出し」をつけてください。

７．提出方法：原則として、第28回大会専用ウェブサイト(https://28th-tenri.joes.gr.jp)から、原稿データをweb提出してください（Wordファイル、PDFファイル）。なお原稿の校正は行わず、そのままオフセット印

刷で抄録集に記載します。

８．原稿締切：2025年5月12日（月）必着

９．その他：上記の提出要領に沿わない原稿は受付けません。なお上記意外に「野外運動データベース(ROP)」登録上必要な情報を提供していただく場合があります。

実践報告（ポスター）抄録原稿提出要領

抄録集に実践報告の概要を掲載します。以下、原稿の作成・提出の要領、留意事項をご確認ください。

１．原稿内容：抄録集に概要を掲載するため、「演題」「英文タイトル」「氏名と所属」「概要(200字以内)」を作成して下さい。また、演者氏名の前に〇印をつけて下さい。

２．提出方法：第28回大会専用ウェブサイト(https://28th-tenri.joes.gr.jp)から、原稿データをweb提出してください(Wordファイル、PDFファイル)。なお、原稿の校正は行わず、そのままオフセット印刷で抄録集に記載します。

３．原稿締切：2025年5月12日（月）必着

４．その他：上記の提出要領に沿わない原稿は受け付けません。

自主企画シンポジウム　抄録原稿提出要領

抄録集に自主企画シンポジウムの紹介を掲載します。以下の原稿の作成・提出の要領、留意事項をご確認ください。

１．原稿内容：「シンポジウムテーマ」、「テーマの英文」「企画担当者（所属・役割も含めて）」「企画の趣旨（400字程度）」を作成してください。大会実行委員会でA4版1/2頁程度に編集し、抄録集に掲載します。なお、登壇者については、氏名、所属、イベントでの役割（コーディネーター、話題提供者、指定討論者など、ご自由に設定してください）を明記してください。

２．提出方法：第28回大会専用ウェブサイト(https://28th-tenri.joes.gr.jp)から、原稿データをweb提出してください(Wordファイル、PDFファイル)。なお、原稿の校正は行わず、そのままオフセット印刷で抄録集に記載します。

３．原稿締切：2025年5月12日（月）必着

４．留意事項

・申込多数やテーマが重なった場合は、大会事務局で調整の上、6月上旬に申込者に決定連絡する予定です。

・テーマや趣旨が本学会の趣旨と著しく異なっていたり、事前の申込内容と著しく違う場合などは、実行委員会の判断で企画を取りやめていただく場合がありますので、十分にご留意ください。

・原稿提出後に、企画内容・場所・機材等について、申込者にメール等で連絡調整をする予定です。

特集「これからの野外教育学会の広報を考える」

日本野外教育学会ニュースレターは、今号で100号をむかえることとなりました。これまでのニュースレターをふりかえるとともに、これからの学会における広報の在り方について検討していきたいと思います。

はじめに、歴代の広報委員長を歴任された先生方より、これまでとこれからについてご意見をいただき、つづいて、皆さまにご協力いただいたアンケート結果をもとに、広報委員会で意見をまとめました。

日本野外教育学会広報委員会へ期待すること

中野 友博（びわこ成蹊スポーツ大学）

本学会が設立されたのは28年前の1997年でした。私は、設立当初より広報委員として、また広報委員長として学会運営に携わってまいりました。

当時は、SNSをはじめとする広報媒体はHPのみでした。そのような状況下で、学会員を対象としたニュースレターは紙媒体で年4回発行されていました。

学会が野外教育を学際領域として、野外活動、自然体験、冒険・環境教育、林業、観光、地域振興など多様な領域を含んでいたため、学会員に対して様々な実践や研究の具体的な情報を伝える必要がありました。そのため、巻頭言を各領域の主要な研究者に依頼したり、特集内容も「冒険教育」「環境教育」「評価と効果」「四季に応じた実践」「フィールドに応じた実践」などを順次取り上げました。研究者と実践者の交流や意見交換を活発に行うために、各地域で活動している団体会員の紹介や、各領域関連の図書紹介も毎回取り上げました。

また、現在では御法度となっている「会員動向」の取り扱いについても、当時は会員名簿を作成していたこともあり、新入会員について氏名のみならず所属や現住所、連絡先まで掲載していました。会員が野外教育に関する情報を得る手段は、まずニュースレターや図書、雑誌、それに加えてホームページがスタートしたばかりで、ニュースレターの内容や即時的な行事案内なども掲載していました。

その後の20年で、情報発信の形態が急速に進化し、社会情勢が変化する中でニュースレターの形態や内容にも変化が求められてきました。野外教育関連の情報も、多様な方法で入手できるようになっています。

野外教育に関わる社会状況や子どもたちを取り巻く環境が大きく変化する中で、野外教育に関わる産業やステークホルダーに関する情報を会員と共有する必要もあると考えられます。また、その上で新入会員の方にコラムなどの原稿を依頼することも重要になっていくのではないでしょうか。日本野外教育学会が他の学会や観光、地域活性化に関わる機関や産業の情報共有を行うことは、学会設立の趣意を果たす上で重要な内容となってくると思われます。

以上のように、広報委員会の役割は設立当初よりもさらに重要な位置づけとなってきています。より多様で有用な情報を発信していただければと思います。

ふり返れば12年！？

小森 伸一（東京学芸大学）

この原稿依頼をいただき、「そういえば正確には自分はいつから広報委員会委員長だったかな？」という疑問が浮かびました。それで過去の関係資料を確認したのです。そうしたところ、2012年度からでした（おそらく間違いないかと）。そして気付けば、2024年度の総会までの4期・12年間（第7～10期理事会）において勤めさせていただきました。途中コロナ禍も挟みましたが、そんな10年以上もやっていたかなというのが実感としてあります。これまで、そして今後の展開を見据え、区切りのよいタイミングを見計らって、現委員長の山田先生にバトンタッチさせていただいた次第です。

広報委員会の取り組みとしましては、大きく2つあります。1つはニュースレター（NL）の発行で、もう1つはホームページ（HP）の管理・運営となります。自分の在任期間中をふり返りますと、大きな変化としては、次のような点があったかなと思います。

NLについては、自分は「60号～97号」の配信に関わりました。私が着任した時には年4回の発行でしたが、2014

年度より年 3 回となりました。学会研究誌との内容の重複が見られていたのでそれを避けてスリム化したのと、年間 1 号分を減ずることで、その分各号においてより厚い内容として充実させていこうというのがその理由でした。また、その年の 10 月号（69 号：vol. 18, no. 2）から電子配信が基本となったことでしょう。ただし、各年度の最後の配信となる 3 月号については、翌年度の学会大会への申し込みや学会費納入案内等の関係から、現在でも印刷物でお送りしています。

次に HP についてです。もともと、HP は事務局がおかれる総務委員会と連携して運営されていました。そして、更新や発信、コンテンツなどについてより充実させていくことを目的に、私が着任した 2012 年度から「HP 検討ワーキンググループ」が結成されました。これは、各委員会の横の連携を密にしていくために、各委員会からの代表者メンバーで構成された委員会を横断する連合形式のグループでした。なお、2014 年度より「HP 運営グループ」の名称となって今日に至っています。

また HP についての大きな変化としては、2021 年に大幅リニューアルされたこともあるでしょう。近年では多くの人がスマートフォンを活用した情報収集やアプローチが主となっているという背景から、当学会 HP でもスマートフォンでの閲覧に対応した形での大きな改修となりました。リニューアル直後は、少々見にくかったり使いにくかったりした点もあってご迷惑をおかけしたところもあったかなと思います。その後適宜手当てを施して、今では見やすさや使い勝手等だいぶ改善されたのでないでしょうか。

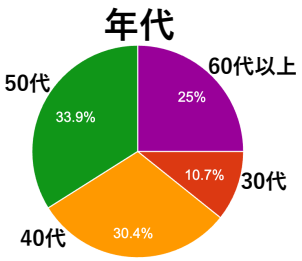
自分の在任中は、自身がとくにこれをした！という強い意識はありませんでした。一方であらためて思い返してみると、その時々の社会動向に応じる形で、少しずつですがアップデートされてきたのだなあと感じるところです。これからは、さらに AI の発展も相まって、今まで以上に一層の ICT＝情報化が進んでいくのだと思われます。情報提供を役目とする広報委員会としては、そのようなテクノロジーの進化への適応は必然となるでしょう。積極的にそれを活用しつつ、より充実した委員会の取り組み、ひいては有益な情報発信の活動となりますよう応援しています。

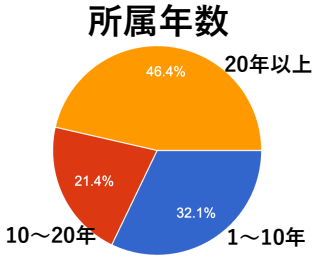
野外教育学会の広報（ニュースレター）に関するアンケート結果

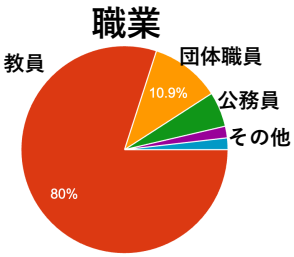
今後の広報の在り方について検討することを目的に、学会員を対象に広報に関するアンケート調査を実施いたしました。ご回答いただいた会員の皆さまありがとうございました。

1. 回答者の概要

回答者は全体で 56 名でした。 回答者は 40 代以上が多く、8 割が教員で、20 代や学生からの回答は得られませんでした。所属年数の多い会員からの回答が多く、46%は 20 年以上所属した会員でした。

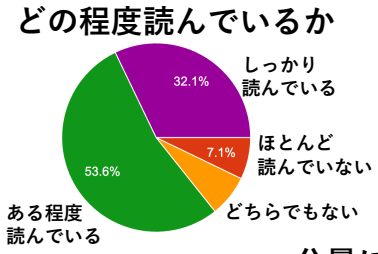


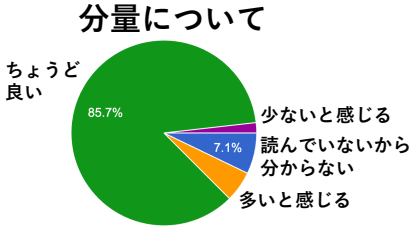


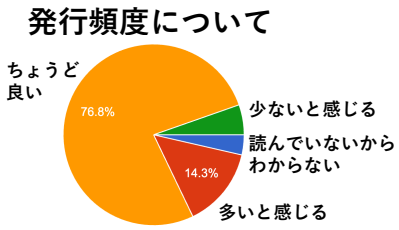


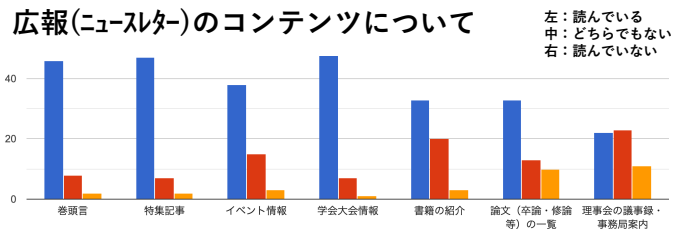
2. 現状のニュースレターについて（年 3 回の発行。2 回はデータ配信、1 回は紙媒体での送付。）

回答者の 85%がニュースレターをしっかり、またはある程度読んでおり、分量もちょうどよいと感じていました。発行頻度については 75%以上がちょうど良いと感じていますが、多いと感じている人も一定数いました。読まれている内容については、学会大会情報、巻頭言、特集記事が多くの人に読まれていることがわかりました。







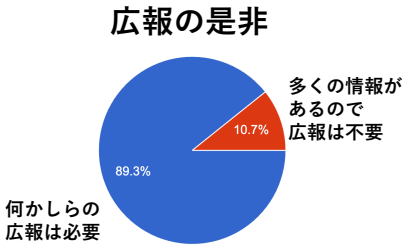


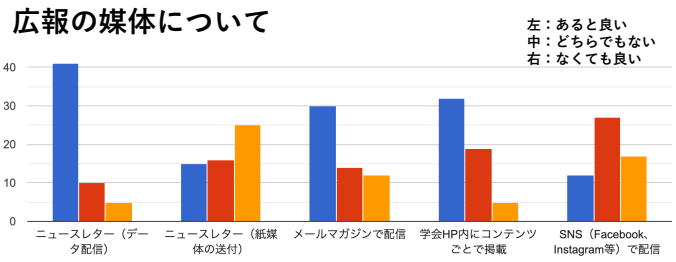
読まない理由について

・電子版が発行されたことに気づかなかった。他と紛れてしまった。
・必要な時に、ホームページで確認すれば十分。
・興味がない。目新しいものがない。
・卒論のテーマはニュースレターよりも HP 掲載が適切。一般会員にとっては、大学教員の研究テーマや科研費情報の方が興味深い。

3. これからの広報について

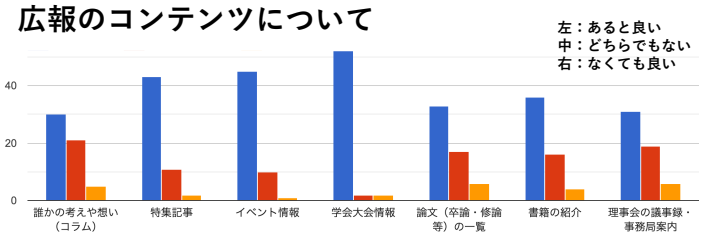
9 割近い人が、何かしらの広報は必要であると感じていました。広報の媒体については、電子版ニュースレターが最もニーズが多く、それ以外には、メールマガジンや学会 HP の活用を望む人が多く、紙媒体のニュースレターや SNS の活用については、一部の方からの要望はあったものの、なくても良いという人の方が多くありました。広報のコンテンツについては、学会大会情報が最もニーズが多く、その他に特集記事やイベント情報も必要とされていることがわかりました。





広報の媒体に対する意見や提案

・速報性の高い情報（イベント・大会・研究会案内など）は電子媒体（HP・メール・SNS）で頻繁に発信することが望ましい。
・じっくり読んでほしい情報（特集記事・巻頭言・理事会議事録など）はニュースレターで提供する方が適切。
・学会の記録としての広報は、巻号・発行年月日を明記し、後に引用可能な形態で保存することが重要。
・HP の情報発信力が弱いため、見やすさや更新頻度を改善し、会員・非会員ともに有用な情報を提供できるようにする。
・SNS は学会員以外への広報に有効だが、学会の性質と合うか慎重に検討し、適切な活用方法を考える。
・メーリングリストは即時的な情報共有に有効であり、定期的なリマインドメールの送付にも適している。
・ニュースレターは読み物としての価値があり、特集やエッセイなどを掲載する場として活用するのが良い。
・紙媒体はじっくり読まれる利点があるが、コストやライフスタイルの変化を考慮し、発行の必要性を見直す。
・情報の種類に応じて、HP・SNS・メール・ニュースレターを適切に使い分けることが求められる。



広報のコンテンツに対する意見や提案

・コラムは普段関わりのない方の視点に触れられる点が興味深く、今後も定期的な配信を希望。
・勉強会・研究会・イベント・セミナーの情報は、できるだけ早く発信してほしい。
・野外教育の効果に関するプレスリリースを横断的にまとめた情報が欲しい。
・特集記事や書籍紹介は興味深いが、理事や一部の会員への負担が大きくなる形での継続には懸念がある。
・ニュースレターは学会誌とは異なる価値があり、理事会議事録などは確実に継承してほしい。
・ペーパーレス化を進め、メディアを活用してインタラクティブな発信を検討すべき。
・関連学会・団体・国際学会の情報も掲載してほしい。

広報全般についての要望やアイディア

・デジタルプラットフォーム（ポータルサイトやSlack・Discordなど）を活用し、学会情報の一元管理や会員間の交流の場を提供してはどうか。
・広報の情報発信の速さ・頻度を向上させるため、専属担当者や業者委託を検討してほしい。
・ニュースレターは読み物中心とし、イベント情報はホームページへ移行。発行頻度を減らし、更新時のメーリングリスト通知を導入してはどうか。
・費用対効果や業務負担を考慮し、ニュースレターの簡素化やペーパーレス化も検討すべき。
・学会の広報は会員向けだけでなく、非会員が関心を持ち入会したくなるような情報提供を強化すべき。
・野外教育研究の動向を広報紙を通じて共有し、学会大会以外の場でも情報発信を充実させてほしい。
・学会誌やニュースレターを全国の図書館に所蔵してもらう取り組みを進めるべき（例：創刊号の寄贈など）。
・学会広報では、研究だけでなく実践にも光を当て、現場の課題や実践研究の発信を強化すべき。

ニュースレターおよび広報に関する今後の方向性についての座談会

参加者： 山田 亮（委員長）、伊原 久美子、井上 真理子、岡田 成弘、瀧 直也、中丸 信吾

学会員に対するアンケート結果を受けて、広報委員会ではニュースレターおよび広報に関する今後の方向性について座談会を開催し、意見交換を行いました。

座談会では、まず山田委員長よりアンケート結果が共有されました。全体的にニュースレターに対して肯定的な意見が多く、継続的な読み物としての価値が評価され、ニュースレターが1997年の学会創設以来、会員の重要な情報源として機能してきたことが報告されました。その上で、今後の方向性について、以下の話題を中心に意見交換がなされました。

1．ニュースレターの発行媒体と頻度について

・アンケート結果からニュースレターの特集記事や読み物として一定の評価を受けている。
・年代により媒体の好みが異なり、40代以下の若い世代はデジタル媒体で十分と考えている一方、上の世代は紙媒体の必要性を感じている。
・現状のニュースレターの形式を維持しつつ、年3回の発行頻度が適切である。
・紙媒体とデジタル配信の併用を継続し、それぞれの特性を活かした情報提供を実施することが必要である。
・読み物としての情報とタイムリーな情報では性質が異なるため、メーリングリストやホームページでの随時更新と、年間数回発行のニュースレターを使い分ける。
・ニュースレターの発行時期について見直しを検討する。

2．ホームページの改善について

・学会のホームページが使いづらい状態であり改善する必要がある。
・予算面での検討や専門家との連携が必要である。
・他学会のホームページを参考に使いやすいホームページの構成を検討する。
・関連学会や業界団体からの意見聴取を行う。
・ホームページ運営グループと広報委員会の合同会議を開催する。

3．メールマガジンの活用について

・アンケートでは半数程度がメールマガジンを望んでおり、適切なタイミングでの情報発信ツールとして効果が期待できる。
・メールマガジンの運営は負担があるため、最小限の情報に絞った配信を検討する。
・定期的なリマインド情報の発信により学会大会や研究集会の参加を促進する。
・メールマガジンの活用について、ホームページの改善と併せて検討を進める。

4．今後の方向性について

意見交換の結果、広報委員会として広報活動を活性化させるため、今後の方向性について以下のように検討を進めることが確認されました。

・ニュースレターは紙媒体とデジタル配信を併用、年3回発行し、それぞれの特性を活かした情報提供を行う。
・ホームページとニュースレターの連携方法を検討し、情報発信の効率化を図る。
・ホームページ改善には専門家の意見を取り入れ、予算措置を含めた本格的な検討を進める。
・メールマガジンの活用について、運営負担と効果を考慮しながら検討を進める。
・アンケートの回答者に偏りがあったため、今後は様々な立場の人からの意見も踏まえ、広報のあり方を検討していく必要がある。

第7回研究集会報告

実行委員長　岡田成弘（東海大学）
実 行 委 員　瀧　直也（信州大学）
張本文昭（沖縄県立芸術大学）
福富　優（至学館大学）
吉田雅人（神田外語大学）
吉松　梓（明治大学）

2024年12月1日（日）に第7回研究集会が至学館大学で開催されました。これまで東京、大阪で開催されてきた研究集会でしたが、初めて中部地方（愛知県）での開催となりました。これまで同様、対面式とオンライン配信(Zoom)のハイブリッド形式で開催され、21名が対面参加、7名がオンライン参加となりました。研究集会は、学会員の研究推進に資することを目的として、企画委員会事業として毎年開催しています。今年は、実行委員で協議し、「畏敬の念」と「大規模データの分析・二次利用」がテーマとなりました。

午前は、「畏敬の念について考える」というタイトルで、名古屋大学の高野了太先生にご講演いただきました。まず初めに、Awe（畏敬の念）についての理論的背景を説明していただき、Aweの一般的な定義や特徴について紹介していただきました。その後、Awe の研究の歴史を振り返り、Aweが向社会的行動やウェルビーイングを向上させることを解説していただきました。そして、高野先生の研究として、Aweを感じている時に脳がどう活動しているか、身体の生理反応（瞳孔や発汗等）がどうなっているかを調べた実験研究をご紹介いただきました。さらに、高野先生が作成したAwe Experience Scale日本語版についてご紹介いただき、研究集会の参加者を対象にデータ収集を行い、その結果について解説していただきました。

午後は、「大規模データの分析・二次利用について」というタイトルで、浜銀総合研究所の有海拓巳先生にご講演いただきました。まず初めに、浜銀総合研究所についてご紹介いただき、シンクタンクとしての役割や文部科学省からの委託調査について説明していただきました。その後、データの二次利用の重要性とその方法について解説していただきました。文部科学省の「21世紀出生児縦断調査」や東京大学社会科学研究所の SSJDA（Social Science Japan Data Archive）のデータについてご紹介いただき、これらのデータの二次利用の方法や手続きについて解説していただきました。また、データの二次利用のメリットとして、調査にかかるコストの削減、信頼性の高いデータの利用、基礎的な集計データの活用、知見の共有と蓄積があることを説明していただきました。一方で、必要なデータが必ずしも存在しないこと、データが古い場合があること、利用手続きが煩雑であること、誤った解釈のリスクがあることなどのデメリットについてもご説明いただきました。

午前・午後ともに、質疑応答も盛り上がり、参加者の満足度も非常に高いものになりました。この研究集会が、学会員および本学会の研究推進に貢献することになれば幸いです。講師の先生方をはじめ、研究集会にご尽力いただいた皆様、参加者の皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。講演の内容は、年度内に発刊される「野外教育研究」に掲載されます。ぜひご覧ください。

（文責：岡田成弘）

2024 年度　野外教育に関する学位論文題目リスト

日本野外教育学会広報委員会は、会員のみなさまにご協力いただき、国内の大学の学部生・大学院生が昨年度執筆した野外教育に関する学位論文（博士論文、修士論文、学士論文）の題目情報を収集し、題目リストを作成しました。会員のみなさまの情報交換や研究の動向把握などにご活用ください。

・本リストは日本国内で執筆された野外教育に関するすべての学位論文の題目情報は網羅していません。

・2025 年 2 月末までに会員の方々から提供していただいた情報をもとに作成しています。

・執筆者本人の許諾を得て、指導教員が野外教育に関係する内容であると判断した題目を掲載しています。

博士論文（大学院博士後期課程）

大学名	学生氏名	論文題目	学部名	学科・専攻名	指導教員名
筑波大学大学院	渡邉 仁	大学体育としての野外運動が学修者の創造性に及ぼす影響	人間総合科学学術院	大学体育スポーツ高度化共同専攻	坂本 昭裕

学士論文（学部）

大学名	学生氏名	論文題目	学部名	学科・専攻名	指導教員名
北海道教育大学岩見沢校	葛西 花	登山体験がチームスポーツに及ぼす影響～大学女子バスケットボール部を事例として～	教育学部	スポーツ文化専攻アウトドア・ライフコース	濱谷 弘志
	池口 慶	道迷い遭難防止に対する登山アプリの有効性			
	齋藤 彩空	登山体験が自己成長に及ぼす効果			
	門屋 快	バーチャルリアリティーでの疑似自然体験による心理的効果			
筑波大学	新垣 郁也	短期野外キャンプが学生芸人のコミュニケーション・スキルに及ぼす影響 ―パーソナリティに着目して―	体育専門学群		坂本 昭裕
	中野 真太郎	初年次教育としての野外運動の授業が自己肯定感と協調性に及ぼす影響			
	榎本 幹也	新潟県胎内スキー場におけるグリーンシーズン期の積極的利用に関する研究			渡邉 仁
	小池 喜蔵	過去の自然体験がキャンプ志向に与える影響―キャンプ志向プロセスと関係性の検討―			
	堀 日向太	登山経験が幸福感に与える影響			
東京学芸大学	神倉 紗花	教育学部の大学生が考える小学校における自然体験活動に関わる意識調査 ―幼少期の野外活動経験の多寡及び外部委託指導の認知に着目して―	教育学部	初等教育教員養成課程保健体育選修	小森 伸一
	木下 裕貴	野外教育におけるキャンプファイヤーについての一考察 ―今日的課題をふまえた今後のあり方を視座において―			
	中村 峻太朗	コロナ渦における自然体験活動の多寡及びその心情についての研究 ―令和2年度の厳しい規制を経験した大学生を対象にして―			
	石澤 航大	少年期の自然体験活動の多寡とその後の大学生の資質能力との相関関係についての研究 ―自己肯定感自立的行動習慣に焦点を当てて―		中等教育教員養成課程保健体育専攻	
國學院大學	小寺 那奈	現代のファミリーキャンプの意義に関する一考察	人間開発学部	子ども支援学科	青木 康太朗
明治大学	島田 翔馬	若者を対象としたスキーヤー・スノーボーダーに対するイメージ調査	経営学部		吉松 梓
	林 大悟	ひとり親家庭の子どもが抱く成人男性イメージに自然体験活動が及ぼす影響			
	宇津木 一朗	幼児期の自然保育の経験がその後の人生に与える影響と意味			
	成林 花	大学部活動としての登山が集団凝集性へ与える影響 ―ワンダーフォーゲル部を事例にして―			
	土屋 真之介	自然体験活動の経験と大学生の環境配慮行動との関連			
	加藤 大明	アウトドアサウナのリラクセーション効果に関する研究 ― 一般的なサウナとの比較による検討 ―			
	近藤 吏矩	高齢者のハイキング実施と認知機能との関連			
	石橋 昂耀	奥多摩町のキャンプ場経営と地域経済への影響 ― 第二次キャンプブームとコロナ禍に焦点を当てて―			
	松坂 直樹	野外活動を利用した地方自治体の婚活事業に関する実態調査			

大学名	学生氏名	論文題目	学部名	学科・専攻名	指導教員名
東京女子体育大学	西田 圭恵	マダニポケットマニュアルの開発と有効性の検討	体育学部	体育学科	永井 将史
	伊藤 楓	若年女性におけるキャンプの参加動機と阻害要因に関する研究			
	伊藤 柊	自然体験が女性の社会性に及ぼす影響について			
	市吉 未和	混合型キャンプ実習における聴者と聴覚障害者の学修効果の違いについて			
	岩 小鈴	登山時の達成感と疲労感の関係に関する研究			
	菊池 和	登山者向けツキノワグマ関連情報に用いられる言語に関する一考察			
日本女子体育大学	一条 恵理子	主観的幸福感と自然体験活動の関係性について	体育学部	健康スポーツ学科	中丸 信吾
	大井 笑生	自然体験活動が自己効力感に与える影響			
	大脇 遥香	自然体験活動が環境保護意識および環境配慮行動に及ぼす影響			
	海藤 陽向	アウトドア活動の好き嫌いに関する親の影響について			
	佐々木 陽奈	小学生の自然体験と生活体験の関係性について			
	佐藤 未悠	体育・スポーツ系大学生における野外活動の実態と意識について			
	鈴木 歌音	ペットと野外活動をすることの影響とその理由			
	髙須 あやめ	発達障害者がキャンプをすることの影響			
	鶴田 愛果	キャンプ経験者と未経験者の意識の違い			
	長谷 歩果	海とプールに関する意識調査			
	根本 真衣	登山経験によるリスク認識や対応の違いについて			
	野木村 凛	自然体験が自己評価に及ぼす影響			
	野口 乙女	日本と韓国での外遊びの違い			
	松谷 多恵	野外での食事のおいしさと野外炊事の意義			
東海大学	青島 知輝	自然体験の頻度が大学生の主観的幸福感に及ぼす影響	体育学部	生涯スポーツ学科	岡田 成弘
	佐藤 文彦	キャンプカウンセラーの勢力源泉の差異 －キャンパーの年代、性別および評価の視点に着目して－			
	田中 啓一朗	人が海に行く理由－性別と世代による比較－			
	田中 郁弥	大学生が抱くアウトドアスポーツのイメージ －アウトドアスポーツの種目間と日本人及び外国人の違いに着目して－			
	永田 涼介	登山中の会話とグループの状態が主観的疲労度に及ぼす効果			
	平本 七輝	アウトドアの要素が男らしさのイメージに及ぼす影響			
	星野 泰輝	過去の環境が大学生の自然体験の好意度に及ぼす影響			
信州大学	加藤 広晴	組織キャンプ参加に関する保護者の意識	教育学部	野外教育コース	瀧 直也
	和田 一歩	フリースタイルスキーにおけるビンディングと怪我の関係性			
至学館大学	今村 一花	キャンプとグランピングの求めるものの違い	健康科学部	健康スポーツ科学科	福富 優
	大林 健之助	登山者の登山動機に関する調査			
	貝谷 祥梧	魅力的に感じるキャンプファイヤーとは			
	河井 悠登	夏場のキャンプ初心者に必要な道具の機能に関する調査			
	澤近 遥希	キャンプ実践を通したキャンプカウンセラーの成長と求められる力の調査			
	関原 大介	フローに入る要因についての考察			
名桜大学	檜垣 奉臣	登山実習運営学生スタッフの自己効力感と社会的スキルの関係性についての調査	人間健康学部	スポーツ健康学科	遠矢 英憲
	石川 楓馬	沖縄県のSUP提供業者における安全管理の実態と事故発生状況の関連について			
	齋藤 千瑛	スクーバダイビング実習が大学生のストレス変化に与える影響 ～プール実習、海洋実習を通じて～			
	堀 楓雅	体験ダイビングにおける不安要因と充実度の関連性			
	本村 孝徳	沖縄県のビーチ利用者の安全意識調査 －マリンスポーツと海洋危険生物の認識－			

日本野外教育学会